

第3部歴史編第1話

麻婆豆腐のふるさと 中国

日中生産性交流25周年を記念した「訪中使節団」に参加し、生産性運動を共に推進している中国企業連合会首脳らと北京で会談した。労使関係や経営管理など日本に多くを学びたいとし、今後日中共同プロジェクトを双方で研究し、具体化していくことなどを話し合った。

このあと新疆ウイグル経済委員会や成都企業連合会、上海企業家協会等を訪れた。7年ぶりの訪中であつたが報道や伝えられる映像で、おおよその理解をしていたつもりであつたが、予想を遥かに超える経済発展と、一般市民の生活レベルの著しい向上を目の当たりにして驚嘆した。

上海総領事館の話では上海に限っても、日系企業はすでに5千社が進出し、さらに毎日2社のペースで増加しているという。

四川省成都是人口約1千万人。かつての蜀の国である。三国志の劉備玄德や諸葛孔明ゆかりの地で、生涯流浪の大詩人杜甫も、ここでひとときの安息を得て多くの詩を詠んだ。四川といえば食道楽は歴史に思いをはせる前に、まず激辛ベースの四川料理の故郷を連想する。辛さに痺れ舌の感覚をなくして、汗と涙で味わう四川料理は一度味わったら其の魔力に取り付かれてしまう。

日本人にも馴染みの麻婆豆腐のルーツはここ成都にあつた。麻（マー）は痘痕（あばた）という意味で、昔陳さんという痘痕のおばあさんが工夫した豆腐料理なのだそうだ。成都の街中に「チンマーポ豆腐店」が4軒あると説明を受けた。

世界中に知られたマーボ豆腐の本家本元は、古びた2階建ての店構えで「陳麻婆豆腐」と大きな金看板を掲げている。

驚いたことに本家“陳麻婆豆腐店”は、民営化流行の中国にあって、いまなお国営であるそう。味は非常にいいが（食わせてやる式）でサービスは最低という。

一方民営化した3軒の陳麻婆豆腐店は従業員の教育が行き届き、接客は横浜中華街の店よりもむしろいい。



成都にある陳麻婆豆腐の本家（国営）

この日はホスト側の四川省企業連合会主催の招待宴が、市内の立派な四川料理店に設営されていた。ホスト側の配慮で麻婆豆腐総本家の味を是非にと願うわれわれの希望をかなえようと、国営の陳麻婆豆腐店からマーボ豆腐の出前が届いた。

ひき肉が比較的多く盛り付けられ、涙が出るほどの激辛、それも唐辛子の辛さのみならず舌にぴりりとくる辛さもある。門外不出の企業秘密であろう、さまざまな香料が入っていて、えもいわれぬ味をかもし出している。テーブルには当店自慢の麻婆豆腐も並んでいるが、ほとんど手をつける人もなく出前の陳麻婆豆腐はたちまち皿が空になった。

ところで旅のまにまに「国営」と称する土産物屋に案内された。立派で高価そうな玉器、宝石、刺繍、書画骨董の類を商う店である。しかし時にはとんでもない物も目にする。例えばブランド品のコピー商品など、男のわれわれが見ても明らかに偽物とわかるものが堂々と陳列されていたりする。さらに清朝時代の絹布に書かれた見事な極彩色の春画集を見つけた。興味を示そうものなら初値200万円を一挙に60万円まで値引きし、何とか売らんかなと形相すさまじく迫ってくる。拳句の果ては安くしておくからとバイアグラを売りつけてきたのである。私たち日本人が持っている国営のお堅いイメージとは、ずいぶんかけ離れた中国版国営店のひとコマである。

中国は5年もご無沙汰しているとまったく様変わりして、見知らぬ土地へやってきたかのような印象を往々にして受ける。市民の服装は大都會では日本人とほとんど変わらないし、奥地へ行っても、もはや人民服など見たくとも見当たらない。大都市は超高層化されたビルが建ち並び、そのデザインは斬新奇抜で人目を引く。都市の外観は東京よりも北京や上海の方が、はるかにすごいという印象を受ける。また既に経営者の中には戸建の別荘を持つ人も現れてきた。20年ほど前、中国では成金を指す「万元戸」という言葉をしばしば聞かされたが、このたびはただの一度も聞かなかった。すでに死語となってしまったのであろうか。いまや「億元戸」とも称すべき新興成金族が続々誕生しつつあるのだらう。ところで、中国側から合作、合併、協力、提携、投資など表現はさまざまであるが、日本とジョイントを望む声をしばしば耳にする。日本に何を求め、狙いは何か大いに気がかりである。中国の人口は12億強、60歳以上が総人口に占める割合は15%である。日本では老人パワーがここに溢れ街中を闊歩しているが、中国では高齢者の姿をほとんど見かけない。この国の高齢者はどこにどうしているのだろうか、これまた気にかかる。

さて、オリンピックや万博の開催を控え、驚異的なスピードで経済発展を遂げている中国社会は、投資をはじめとする経済活動の分野で、日本や欧米の先進諸国を競わせつつ、絶妙のバランスをとりながら経済運営を行っている。国際社会で徐々に発言力を増しつつある中国の実力は、5年も10年も前のイメージで理解しているわれわれの理解度を、遙かにしのぐ経済大国にすでにある。今般、行く先々でしたための拙いメモの端々を総括してみると、中国恐るべし、「大丈夫か日本」となる。